

## アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

## 第 2 章 日本人医師の登場

正確に言うと、筆者が倒れた日に、カフジには日本人医師がひとりいるにはいたのだった。

慈愛医大から派遣されたドクターだという労務部の触れ込みに、カフジの従業員とその家族は小山昭三医師の着任を大歓迎したものだ。久しぶりに来てくれたまともな筋からの医師ではないか。

日本人専用の集会場では、盛大に歓迎会が催された。鉱業所の最高幹部の浦井専務の歓迎の辞に引き続いて、促された本人が着任挨拶を行った。

「皆さん！絶対に夜間往診には呼ばないで下さい」

開口一番の大ジョークに、集まった日本人従業員は大爆笑した。

「今度の先生は、腕が良いだけでなく、冗談まで解るじゃないか。ハハハ」

しかし、それは受け狙いのスピーチではなく、真剣な本音だった。麻酔薬投与の誤診による死亡事故の大問題を起こして日本に居られなくなり、法的対応は弁

護士に任せてほとぼりを冷ますために僻地医療へ逃げて来た医師だったのだ。もともと、日本でも重度のノイローゼに陥っていたものを、着任した瞬間に更に重度の現地不適応症に陥ってしまった。医者のために医者を必要とする精神状態なのだ。僻地診療への献身などという高邁な意識など持っているはずもなく、夜間往診は言うに及ばず、病院での勤務時間内における診療も論外で、傍らにいる日本人看護師に面倒臭さそうに指示を与えるだけだった。

筆者自身、アラブ人食堂で食べたウェルダンというよりは炭のようによく焼いた固いステーキの塊を飲み込んで、喉の奥に擦過傷を負ったことがある。悪評はさんざん聞かされていたものの、話半分に受け取っていた筆者は、その実像に接して驚いた。

痛みを訴えても、小山はデスクに座って横を向いたままで正対する瞬間はまったくなかったし、触診もしてくれない。筆者がしゃべり終わると、傍らの看護師に面倒くさそうに一言。

「おい、ルゴールを塗ってやれ。一日三回塗る分だけ薬を渡してやれ」

診療室では、看護師が喉の一番奥に薬を塗ってくれたものの、女房もない単身寮で、鏡でも見えない深い患部にどうやって塗付しろというのか。

筆者は、悪評が事実であることを確認して、憤然として診療室を出た。

偶然にも筆者が日射病で倒れた日の翌日が、小山が一年間の契約期間を終えてヨーロッパで観光してから帰国する日程に当たっていた。少なくとも丸一日間は医師と患者がカフジに一緒にいたにもかかわらず、危篤状態の患者は診てもらえなかった。

治療に当たったのはパレスチナ人の医師だった。

それではあんまりだと、看護師の平良米子は訴えた。

「せめて患者が危機を脱するまでは、帰国を数日延ばされるべきです！ 後任のドクターへの引継ぎだってあるでしょう」

「そんなの関係あるか！ 引継ぎくらい、お前がやっておけ。契約期間が終わったのだから、俺は帰る！」

瀕死の患者を見捨てて、小山は忌まわしい任地を脱兎のごとく去っていった。後任が到着するまでの空白の一日間、日本人にとって、カフジは無医村状態に等しかったといえる。

深夜一時半にクウェイト空港に着いた赴任者は、煩雑な入国手続きを終えてから、差し回しの車に乗って150キロ南のサウディアラビア国境に向かう。比較的諸事緩やかなクウェイトに比べて、アラブ圏で最も保守的厳格さで恐れられるイスラーム国家のサウディは、殊のほか入国審査が厳しい。カスタムチェックでは、持ち込み荷物の全品検査が行われる。酒やポルノや麻薬の持ち込みを許さないための、いっさい容赦のない検査だ。

禁忌対象ではなくても、どこか疑わしい物品は躊躇なく没収される。質の悪い係官に出会うと、個人的欲求に発する没収も時々発生する。筆者自身、スイスアーミーのサバイバルキット（万能ナイフ）を盗られたことがある。

欲しがっていることは、相手の目の色を見れば一目瞭然だ。係官はシフトチェンジの際に、ゴミ箱を漁ってこれを持ち帰るに違いない。

かくして、赴任者は不愉快至極な国境体験にイライラしながら未明のカフジに辿りつくことになる。それから通称独房と呼ばれる单身寮の自室に案内され、長時間のフライトとふたつの国への入国手続きの疲れを癒すためにシャワーを浴びて仮眠をして、その日の昼前に鉱業所の主要幹部へ挨拶してから職場に案内されるのが通例である。

しかし、後任日本人医師の後藤忠義ドクターは、国境から直接筆者が昏睡する病室へ連れてこられた。これは、鉱業所の参謀長という敬称を受けている総務の吉田泰興部長の配慮だった。危篤状態の筆者を一刻も早く医者に診せるために、吉田は酷暑の深夜の労も厭わず、国境までドクターを迎えに行ってくれた。

平良看護師は新任ドクターに病状を説明するために、ベッドの脇に待機してくれていた。在任が十年間に及びカフジのナイチンゲールと敬愛されている平良は、病状報告するだけでなく、治療に当たっていたパレスチナ人医師との通訳でもあった。アラブ勤務が長い彼女は、アラビア語に習熟していた。

「ナニッ！これはいかん！ おいっ、リンゲル液は投与したのか？」

「先生。それが、この病院にはリンゲル液を在庫していないんですよ」

サウディでの資材購入は、薬剤に限らず新仕様案件を採用するのは難しいのだ。資材購入委員会という政府の審査機関があり、自分たちの旧態な知識を恥じることなく審査するから、どれほど素晴らしいものであったとしても、彼らの認識が追いついていないと採用可とはならない。

我が国の厚生労働省が新薬に許可を与える場合以上に、これが診療現場を阻害する。僻地病院の実態は、新任ドクターにとっては当然であるべき医療レベルか

らは程遠かったということだ。

筆者は、混濁状態ではあったが、二日ぶりにわずかに意識が戻っていた。

「オイッ！ この患者さんの名前は何とおっしゃるんだ？」

「はい、岡本さんです」

「岡本さん。お気の毒ですねえ。この病院にはリンゲル液がないんですよ！」  
うつろな意識の中で、筆者は呆れた。

『なんという馬鹿正直な医者なんだ。たとえ特効薬がなかったとしても、何とか別に励ますためのセリフがあるだろうに・・・』

また熱が上がってきたとみえて、再び筆者の意識は失われた。

病室の入り口で誰かが大きく叫ぶ声を聴いて、再び筆者に意識が戻ったのは夕刻だった。

「エエッ！ これ、あかんわあ！」

声の主は、日本人従業員が自治運営する日本人食堂の菊井義男コックだった。大声の呻き声を発して苦痛を和らげようとする様子を見た素人判断だったが、たまたまこれを聞きとることができた筆者を落胆させた。

『おいおい、病人に聴かせる言葉かよ』

重湯の差し入れは、点滴以外にも何か元気を回復させるきっかけにしようとの、ドクター指示であった。食欲は絶無だったが、砂を嚙むよりもまずく感じる重湯を、こんなところで死んでたまるかという執念で口に流し込んで必死に嚙下した。

特効薬なしの次善の策ではあったが、後藤ドクターの懸命の治療が功を奏して、峠は越えたようだった。その夜、筆者はひとりでトイレに行くことができた。ただし、15メートル先までのトイレへの距離は数百メートルに感じられたし、しゃがんだ姿勢から再び立ち上がるのは容易なことではなかった。

病後の憔悴は尋常ではなかったが、看病人もいないアラブの病室にいても気が滅入るだけだ。筆者はそれから二日後に無理に退院して自室に戻った。

食堂に行かなければ食事にありつけないので、5日ぶりに食堂に出向いた筆者は驚いた。そこにいた70人ほどの従業員全員が事件を承知していた。ニュースがほとんどない隔離されたアラブの日本人租界だから、誰かが死にそうだななどという噂は一瞬のうちに知れ渡るのだ。

「おい、岡本。よかったなあ！」

「元気印が売りだからって、無茶やってるんじゃないぞ」

浦井専務が、筆者がやっとの思いで座るテーブルまでわざわざやってきて祝意を述べてくれた。

「岡本さん。回復されて本当によかったですねえ」

「エッ、専務までご存知だったんですか？」

常に専務と行動をとともにする専務室長の小野が、厳しく注意を与えた。

「オイ、キミッ！ 専務は病室までお見舞いに行ってお下さったんだぞ！」

「エッ、本当ですか？ ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

人事不省状態の時のお見舞いだったのだろう。来室の記憶など全くなかった。

傍らの吉田部長が、ニヤリと笑った。

「もう大丈夫そうだから教えてやろうか。岡本くんは危篤だったんだ。実は、日本へボディを送り返すための棺桶の製作も指示していたんだ。ハハハ」

彼の地で日本人の死者が出た場合、航空荷物扱いで母国に送り返す。内臓を抜いた上で、冷凍処理してアルミ製の箱に詰めるのだ。つまり、屍液が漏れないようにする缶詰だ。日本人従業員の間では数年おきに死者が出る過酷な現場なのだが、縁起でもない棺桶在庫は常備していないから、特殊仕様のアルミ棺は、その都度、鋳業所の工務部が製作する。

「エエツ？ あれを危篤状態っていうのですか！ 道理で苦しいっただけで死ななかつたですよ」

柔道で鍛えぬいた体力と精神力がなかったら、本当に彼岸に渡ってしまっていたかも知れなかった。筆者は、改めて青春を賭けて修行した柔道に感謝した。



#### おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued